

O. Henry の 短 篇

川 津 孝 四

アメリカ文学には南北戦争が終った後、新しい傾向が生じて来た。以前に見えた植民地的色彩や欧州の出店的な姿は薄れて、合衆国的な様相を取り始めた。即ち、William Dean Howelles や George Washington Cable や Frank Norris の作品に見られるアメリカ的な文学がぼつぼつ現われ始めた。然し当時のアメリカの読書界はなお欧州風な色彩を好み、それ等アメリカの社会を描いた小説よりも、トルストイやバルザックやゾラやアナトール・フランス等の小説を喜び、作家達も大陸文学の影響を強く受けた。勿論イギリス文学の影響も軽くはなく、Thackeray や Dickens も忘れられてはいなかったが、トルストイやバルザックやモオパッサンやゾラなどの作品の影響は見落すことが出来ない。ロシアの Realism や、ドイツ文学の粗野な味やフランス文学の論理的構成等は英文学よりもよけいに影響を与えた様である。

以前唯専らに前進を目ざした frontier spirit, pioneer spirit も時代と共に背後を顧み己を見つめる様になり、それまで楽土と思った人生にも現実の悲哀や醜悪な世界を見出し、アメリカ特有の楽天主義も自信も希望も光が弱まり幻滅をすら感ずる様になった。それは当時の経済や政治や道德等色々な方面に現われた世相から来ている。これは欧州の方で幻滅の悲哀から生じた Naturalism, 即ちフローベルやゾラやまたトルストイやツルゲーネフ等に見る傾向にも似た処があるとも云える。

Henry James は Howelles 等と共に南北戦争後のアメリカ新興文学の先駆者の一人であったが、欧州に渡って英国に帰化してしまったし、アメリカよりも大陸を描いたので realism の大家であり乍ら米国的なものとし

O. Henry の 短 篇

て挙げられないが、兎に角アメリカには次第にアメリカを意識し、アメリカの物質的民族的興味や特色を意識する作家が出現する様になった。それにつれて、この国の小説は地方的雰囲気をとらえ、地方的でない小説は一時影を薄くした位であった。然し、地方的な若くは方言的な物語や小説を書いた作家も、多くは各地方や各州を realistic にまた romantic に描写するのみで満足していた。Cable や Freeman はそれ以上に出なかった作家の例であろう。

然し、他方に於いては当時の或る新進作家達は、同じく合衆国の広潤と充実せるアメリカの社会に興味をもって、シカゴやフィラデルフィアやカリフォルニア等を舞台にとって描いた。然し、その地方的舞台を背景としたエピソードや筋付けは、単なる写実から一歩踏み出して、合衆国全体の社会、若くはその或る形態に就いての象徴的な意義を表現しようとした。O. Henry はその一人である。云うまでもなく、斯うした小説が生まれてくる迄にアメリカの作家に与えられた暗示と鼓吹とはゾラ及びモオパッサンから来ている。O. Henry は Yankee Maupassant と云われさせしめた。彼がアメリカの Maupassant と評されたのは単に巧妙な話術家として共通点をもっているからではない。二人の realism が象徴主義にまで高められている点で共通しているからである。この点ではイブセンもそうである。モオパッサンは自然主義作家として科学的な眼で人生を判断したが O. Henry は realistic romanticist として人道主義的温情をもって人生を覗いた。そこに差がある。O. Henry は “I have been called the American De Maupassant. Well I never wrote a filthy word in my life.” (自分はアメリカのモオパッサンと呼ばれているが、卑猥のことを書いたことはない。) と云っているのは唯それだけの意味である。要するに彼は Maupassant の様なエロチシズムがなかったのである。O. Henry は性慾に関する興味は読者自身普通家庭的にいくらかでも満足させられているから、

わざわざそれを取り立てて書く必要はないといったことを何かで述べていた。

この様にして、兎に角、アメリカ文学は地方的に開発され、そこから典型的なアメリカの小説が生れ出る様になった。Upton Sinclair の “The Jungle,” Sinclair Lewis の “Main Street” 等々。だがここで特に注意すべきは、Hawthorne や Poe や O. Henry や Jack London のアメリカ文学と、Frank Norris や Upton Sinclair のアメリカ文学は趣を異にしていることである。O. Henry 等の一群は神秘的、浪漫的、非観念的であるのに対して、Sinclair の一群は社会的、哲学的、観念的である。然も前者は短篇小説の形式をとり、後者は長篇小説の形式をとっている。尤も大概の小説はこの二種類の何れかに入る訳である。文学として何れがよいかということは殆んど問題にならない。ゾラに就いても度々云われている様に、小説というものは何か抽象的な思想的夢魔が作者の脳中に踊っている、作者が作品に没頭している間はその夢魔の存在を忘れて書いているので、少しも作品がそのために損われはしないし、また逆に、O. Henry 等の様に何等社会的、哲学的、観念的基礎がなくても小説は書けるものである。

アメリカ文学には上述の様に、象徴的な短篇小説が現われたのである。何故に短篇小説が盛んになって来たかに就いては色々議論のある所であるが、第一にはそれが近代の journalism に全く適合していたこと、第二には読者の生活に即していたこと、第三には作者の側から云って直接報酬が多く、また幾らでも多くの雑誌からの注文に応ぜられるという理由からであった。

O. Henry だって短篇を専ら書き出したのは一つには金のためであった。彼は獄中で絶えず亡妻の忘れ形見の娘マアガレットの身を心配した。当時ピッツバグの母の里方に引取られて祖父母の手で育てられていた娘

O. Henry の 短 篇

に時々金を送りたいと思った。そこで新聞記者をした経験のあった彼は、獄中勤務の余暇を盗んでは手っとり早く仕上げ金になる短篇小説を書いたのである。読者の側から見ても、短篇小説という形式は Washington Irving や Bret Harte や Poe の短篇小説が示す様に、アメリカでは最も一般向きのタイプのものである。そして、Poe は例外であるが、アメリカの短篇小説の基準が、ロシア、フランス、英国等に於ける近代の世界的傑作ほどに高くはなかったにしても、かなり立派な短篇作家がアメリカから出たのである。Ambrose Bierce, Jack London, そして O. Henry 等々である。

だが、アメリカ語を通じてアメリカの場が短篇小説の形式で世界の人の眼に映る様になったのは、O. Henry をもって嚆矢とする。Henry James の短篇物は前述した様に純アメリカ的ではなかった。Bret Harte や Poe や Ambrose Bierce 等は立派な短篇を書いたが彼等が使用した言葉はアメリカ語でなくて英語であった。豊潤な語彙と新しい修辞学的技巧で O. Henry の短篇小説が東部の都会にデヴェした時、読者は突如として不思議な魅惑と、脳裡にびんと響く様なだが非常に愉快で流暢な言語と語法を感じた。それは、slang の辞典なくしては所謂紳士英語に訳し難い文章で、言葉の使用法は簡潔適切精到で語彙は豊富であった。彼は適切な言葉をその豊富な語彙中から選り出して、その場その場にぴったりする表現をした。彼は安易に書き流す流儀の journalist ではなかった。Henry James の様に言葉を選んだ。然し、一部のインテリ階級のみを喜ばす様な貴族的な文を作ったのではなく、寧ろその反対であった。彼は言葉のデモクラシ化をやったとも云える。彼はプロレタリアの神聖な権利を主張する貧民街の政客以上に言語をデモクラタイズした。だから slang など何の遠慮もなくどしどし使った。大学出の読者の中に判読出来ない者があっても、そんなことにはあまり頓着せずアメリカの大衆を喜ばすことを望

んだ。

彼は単にアメリカ語のみを駆使するに巧みであったのではない。アメリカナイズされたドイツ語、フランス語、スペイン語をもある程度生かして使った。O. Henry は language の master であった。言葉の優秀な運用に依って作家は不滅の榮譽を獲得するものであるが、O. Henry は確かにそうした部類に属する作家であった。彼の言語の使い方は極めて大胆であると共に実に周到精密であった。故に彼は単に作家としてだけでなく、アメリカ語の培養者として、その方面でも重要な位置を占めている。言葉は作品に入る門である。彼の潑刺として人を魅惑せずにはおかぬアメリカ語が、作品の文学的内容よりも先んじて名声を得させたと云っても過言ではない。然し彼の言語の使用法には、婉曲すぎたり、独りよがりになることもあった。彼の euphemism には屢々手を焼くことがある。でも描写表現に驚くほどに巧妙な腕をもっていた。かくして多くの短篇小説が次々に書かれた。1862年9月に生れて、1910年6月に死んだのだからその生涯は僅か四十八年であったし、その上、小説を書いたのは最後の約十年間に過ぎなかったにも拘らず、その著す所の小説は十三巻、二百六十九篇にも上っている。頭初は、獄中から、愛する娘のために送る金が欲しさに小説を書いたが、後には自己の天才的手腕を自覚して、堂々小説市場に著作を送り出した。Anbrose Bierce は Poe を模倣したが、彼は何人をも模倣しはしなかった。彼の短篇は彼独得のものである。何故に短篇小説に終始して一篇の長篇小説も書かなかったかは、前述の様に原稿料の関係からでもあり、journalism や世人の要求からでもあったが、O. Henry 自身の作家生活の年限が短かくその間は短篇に終始して、長篇を書く間なく、また恐らくは長篇を書く意図も持たなかったのであろう。彼には 'The Dream' という断片があるが、これは彼の作が常に slang を使って書かれると云われたのに対して、晩年になってから slang ぬきのものを書く積りでべ

O. Henry の 短 篇

ンを執り、未完成のままに残したのを死後発見されたものである。そこで若し長篇小説を書く意図があり、その技倆があったとしたら、何等かその企てもあったろう。結局 O. Henry にはその技倆がなかったのだと結論する向きもあろうがそんなことを云う必要もなからう。兎に角何れにせよ彼は長篇を一篇も書かなかったのは事実で、短篇のみを書きつづけたが今その著作と篇数とを列挙してみると、

Cabbages and Kings	19 篇	1904 年
The Four Million	25	1906
The Trimmed Lamp	26	1907
Heart of the West	19	1907
The Voice of the City	25	1908
The Gentle Grafter	14	1908
Roads of Destiny	18	1909
Options	16	1909
Strictly Business	23	1910
Whirligigs	24	1910
Sixes and Sevens	23	1911
Rolling Stones	25	1913
Waifs and Strays	12	1917

以上の内 Rolling Stones には彼の初期の新聞記者時代の雑篇を含み、Waifs and Strays にはその附録として彼の描いた地方が詳細に分類されている。また、O. Henry に対する追悼文や評論も採録されている。それ等は Ainslee's Magazine, Everybody's Magazine; Hampton's Magazine; The Bookman, The North American Review 等に O. Henry の死後発表されたものである。Cabbages and Kings は全巻南米を舞台にしたも

のに満ち、The Four Million, The Trimmed Lamp, The Voice of the City, Strictly Business はその内唯一篇を除いて総て New York の物語であり、Sixes and Sevens も多くは同じく New York を背景にしている。Options と Whirligigs はその半ばが New York に関係がある。Heart of The West や Rolling Stones 中の多くは Options 中の数篇と共にテキサスを背景としている。Roads of Destiny にはテキサス、ルイジアナ、南米、New York といった所を舞台にしたものがあり、The Gentle Grafter にもアメリカ各地を舞台にしたものがある。

かく彼はアメリカの各所を背景として殊に New York を最もよくその舞台として描いたが、これ等 13 巻、篇数にして計 269 の短篇中彼の代表的傑作を選ぶならせいぜい二十二三篇位であろう。斯く云っても何も彼の価値を損うことにはならないであろう。何故なら、多くの短篇小説家について、これ以上に期待の出来るものはないからである。

O. Henry の作中に出てくる人物は浮浪者や盗賊や詐欺師や道楽紳士や女給、タイピスト、売笑婦、薬品中毒者、病人等、低級な俗物が多く警官の厄介になりそうな者が多い。彼自らも長く世の中の暗い裏街を歩いて来た経験がある。彼は 1891 年にオースチンの第一国民銀行の現金出納係となったが、1894 年に辞職した。その後銀行の帳尻が合わない所から彼は銀行側から銀行の金を私消したという廉で告訴された。その頃彼は San Antonio という町で The Rolling stone という新聞を出していたが、それも間もなく廃刊して、更に Houston 市に移り住んでいた。彼の死後この事件は何者かの中傷で彼は犯人ではなかったという説も出たが、兎に角、その時は僅か千弗ばかりの金の不始末でオースチンの裁判所へ出頭を命ぜられたのであった。然し彼は出頭の途中気が変って、そのままミシシッピ河の河口の港町である New Orleans へ行き、更に南米へ逃亡してしまった。彼の初期の作、Cabbages and Kings はこの南米放浪時代に経験した

O. Henry の 短篇

ものをその材料としている。1897年二月妻危篤の報に接して、急ぎオースチンの自宅に帰り、その足で自首して出た。翌年二月まで審理は行われなかったが、その間に妻は死んだ。彼の名作 *The Gift of Magi* の中に出て来る女主人公 Dela はこの妻をモデルにしたものであった。妻の死後開かれた裁判で有罪となり、懲役五年の宣告を受け、98年四月二十五日にオハヨオ州の監獄に入れられた。こんな次第であったから、犯罪者や貧乏人やルンペンを人ごととは思わなかったのであろう。また獄中で色々な多くのモデルに会ったのである。というのも、彼は操行善良という理由と、嘗て薬屋を営む叔父の家において、調剤の心得があったので、監獄医の助手に抜擢されたため、色々な囚人に接して観察するだけの暇があったばかりでなく、その頃から既に短篇を時々書く余暇さえあったのである。

彼の作中にうす汚い連中がいつも登場するのは誠に尤もな話である。にも拘らずその作品に一種蔽とした品格があるのは、その取扱い方が機略縦横で、humor が豊かで、なおその態度が非常に人道主義的であるがため、下賤悪徳にも何となく威儀品格を与えることが出来たのである。作中に出てくる悪漢も心から憎めない。卑しい男も心からさげすむことは出来ない。

The Cop and Anthem に出てくる *Soapy* の行為はなかなか憎み得るものではない。

O. Henry は従来の小説で取扱われたものよりも色々ちがった人間に興味をかけた。そのために彼は態々貧民街へ網を投げて、そこに泳いでいる種々な人間をとらえた。彼は New York の貧民街を愛し、常にそこから材料を採ったことは彼自らも述べている。前述の様に *The Four Million* も *The Trimmed Lamp* も *The Voice of the City* も *Strictly Business* も総て New York の下層社会を描いている。*The Four Million* の如きは、その題名からして、New York の市民の戸別的調査から思いついた

ものである。彼は Ainslee's Magazine の associate editor であった Gilman Hall に向つて、「下町を一丁場歩けば一文が出来る、顔を一つ見れば何かを発見する。即ち私の物語が出来るのだ」とか、また「New York の街、一つ一つに一生を暮して見たい。どの家もこの家も各々の Drama をもっているから」と云つたそうであるが、その希望を満足させようとしたのが The Four Million であり、その Contents の左頁の上方に次の様に書いている。

Not very long ago some one invented the assertion that there were only "Four Hundred" people in New York City who were really worth noticing. But a wiser man has arisen—the census taker—and his larger estimate of human interest has been preferred in marking out the field of these little stories of the "Four Million".

O. Henry は New York を愛した。Dickens がロンドンを愛したが様に。然し彼は明るい New York に心をひかれたのではなく、暗い New York に同情を禁じ得なかつた様である。彼にとって New York はアマゾンの奥地の様な深さがあった。彼はその神秘境に陶然として空想に酔っていたのである。死ぬ前年即ち 1909 年に、筆も執れぬ程の病体となつて、North Carolina の Asheville へ転地したが、その美しい山々や、新鮮な空気よりも、New York の塵っぽい空や風通しの悪いビルディングの一室の方が恋しくて堪らず、遂に死ぬ年の 1910 年三月、無理をして New York へ歸つて来た。それは唯死ぬために歸つて来た様なものだった。何故なら彼は三カ月後の六月三日に三十四番街の病院の一室で四十八才でその生涯を閉じたからである。要するに死ぬ迄彼は New York の市街を愛したのであった。

彼はかく New York の街を愛し、また人生の暗黒面に好んで好奇の眼をみはつた。然しそうする彼自身の気持は実に朗かであつた。決して、全

O. Henry の 短 篇

面的に pessimist ではなく、むしろ楽天的な処があり、暗黒よりも明るさを好んだ。それは作品を見ればよく分る。彼の作品は陰惨に見えていて実は微笑ましい。泣かせそうで笑わせてくれる。彼の長所も短所も実はそこにある。彼に対する毀誉褒貶は共にこの謎から生じてくる。

まず彼の弱点として非難されるものを考えてみよう。比較的に真面目な批評家の口からも、彼の作品は浅薄であると屢々聞く。彼の humor は皮相で、誇張があり、pathos もうわずっている。また彼の euphemism のために、晦渋に陥っている例も少なくないと云われる。

彼の mannerism は言葉や文章の上ばかりでなく、小説構成上にも見受けられる。それは物語の結末近くなって読者の意表外に出るあのやり方、即ち surprise とか quick turn とかいうもの、これが彼の作品にはあり過ぎると云われる。然しこれ等も短所とのみは云われない。むしろ、多くは彼の長所であり、彼の作品の独得な面白味を出して、読者をあっと云わせるのである。

The Cop and the Anthem は New York のマジソンスクエアのルンペン Soapy を取扱っているが、この一篇の Surprise を非難する者はこう云うのである。この物語の結末で Soapy が道徳的に目覚めたという何等深い根拠がない。讃美歌があの場合それ程深刻に聞えたとも受取れない。あの書き方は surprise のための surprise である。のみならず、その瞬間には、社会の道德観念の代表者たるべき警官が変節者 Soapy を乱暴にも刑罰へと突き戻して終う。この irony は浅薄である。何故ならこの場面は突飛なやまとなっていて、喜劇俳優のチャップリンが演じそうな幾つもの喜劇的場面の後に来ているからである。即ち、下賤から正義への転換が余りに急角度に行われていて、その動機が明瞭でない。総て偶然性の上に築かれた形となっている。この ironical surprise は作者がその結末を与えるために工夫された機械的な手法に過ぎぬと云うのである。然しこんな

議論にも拘らず吾々は素直にこの *ironical surprise* を受け入れて人生にはそんなことも屢々ありうることと想うのである。

私は一昨年この *Madison Square* のベンチに腰をかけて休んでいる時、かつて映画でみた *Soapy* の姿と本の中の写真による *O. Henry* の姿を想い浮べていたのであった。

次には賞讃者の声を聴こう。

Canada の作家で批評家の *Stephen Leacock* は *Essays and Literary Studies* の中で「全英語界が *O. Henry* を近代小説の最も偉大な作家と認める時がやがて来る。」と云っており、この讃辞は *Hodder and Stoughton* 版の *O. Henry* 全集の扉の見返しに印刷されている。

将来は兎も角、過去を振りかえって見ると、過去に於いてもややそれに近かった時代があった。彼は全英語界と行かなくても少くともアメリカを事実上上座した時代があった。1904年から5年に亘る一カ年である。*The New York World* 紙はこの一カ年間、一週一篇ずつ、その日曜附録に短篇を執筆掲載することを彼に契約させ、一篇百ドル宛の原稿料を支払った。この期間は彼の生涯を通じて最も油の乗った時期で“*The Four Million*”はこの時期の代表作である。当時 *O. Henry* は *Jack London* と共に米文壇を二分していた。二人ともプロレタリア作家であった。勿論社会主義的イデオロギイをもったプロレタリア作家ではなかったけれど。そんな訳で、兎に角、*O. Henry* は一時アメリカ文壇に君臨したのであるから、将来全英語界に君臨しないとも限らない。彼は米語の一つ一つの効果をよく心得ていた。だから、せいぜい 2600 語位で簡潔に鋭く人生の断面を彫り出している。また彼は *humorist* としても侮り難い地位を占め得る。時には *Dickens* に勝ることさえあった。‘*The Furnished Room*’と題する一篇などよい例である。彼の *pathos* も凡庸ではない。但し彼は *character* を漫画化する傾向をもっていたので、*pathos* の味が読者に悲し

O. Henry の 短 篇

く響かないで、却って微笑に転化されてしまうことがある。O. Henry は子供時代から絵がうまく、薬屋の叔父の店にいる頃、今日誰々が店に来たかと聞かれると、それ等の人々の名前を知らない時その顔を描いて見せたので、叔父は直ぐ誰が来たか分ったということである。この caricature を描く味が、小説を書く時の characterization に影響したとも考えられるのである。

O. Henry の作品に対して、同じもの、同じ点についても、賛否両様の批評が聞かれる場合があるが、その何れが正しいかはそう簡単には云えないのである。

凡そ、批評家たる者、芸術作品を批判する場合如何にあるべきか、これはなかなか難しい問題である。人間は十人十色、その感覚の正確さの度合も千差万別だし、知識的、精神的差異は更に甚しいものである。然し批評家が芸術品を測定批評する場合、その物差しとなる主観的機能を指導する、ある基準というものがあべきだが、その基準も時代により、国により、主義によって異なるのである。古典主義には古典主義の理論があり、自然主義には自然主義の原理があり、プロレタリア文学にはその指導原理がある。また短篇小説を批評する場合にはその批判基準とも云うべきものがこれも人によって色々考えられる。短篇小説研究家の Alfred C. Ward によれば世界文学に於ける最も偉大な短篇作家は、世界史に於ける最大の人物即ちナザレのキリストその人だ。キリストの譬話は口伝で後世に伝えられ、誌されて、人間の靈魂の覚醒を目的としている。之等の譬話は技巧的にも改良すべき余地のない程に完成されている。その為に内容となっている平凡な教訓が忘れ難いものになっている。文学上の作品もこれと同断である。事実キリストの譬話も観方によっては立派な短篇小説である。そしてその譬話の特色として次の五項目をあげている。

1. 明快で且つ粘着力の強い魅力をもっている。

2. 譬話が始まると同時に筋が始まり、筋が終ると譬話も終る。そこに何等過不足がない。
3. 明らさまな単純さがある。それが万人の心を打つ様なものであること。
4. 譬話に現われて来る人物は個性を無視せず、然も一つの型を示している。吾々は放蕩息子やその父や兄弟の名前を知ってる訳ではない。彼等がどんな様子をしているかも知らない。然も吾々は彼等を知り得る。この効果ある性格表現は、手法の経済によって為し得られているのである。そして、かく手法が経済化され簡略化されていても、描かれたものと読者の想像力との間には少しの妨害もありはしない。
5. 説話の手法が、筋の始めと終りとの間の最短距離を示していることである。説話は決してその軌道を愚図ついたり、去来はしない、常に敏速に進んで行く。

この五項目は現代の短篇小説にもそのまま適用されると、Ward は云っている。然し、こうした五項目を常に短篇小説の価値判断の基準にするならそれも行き過ぎになるであろう。

O. Henry の作品は現代の一般の短篇小説界に於いて、どんな地位を占めることになるであろうか。Alphonso Smith がその 'O. Henry' の序文中で云っている様に、Irving は米国の短篇を legendize し、Poe は standerize し、Hawthorne は allegorize し、Bret Harte は localize し、そして O. Henry は humanize したと見て差支えない。然も短篇小説は O. Henry の時代になって、断然アメリカの新文学の代表的芸術となった。これには O. Henry が大いに与って力があつたと云わねばならない。

広く世界の短篇小説家の山をみると、さすがに露のチェホフ、仏のモオパッサンは高く聳えて見える。英国にも Thomas Hardy, Kipling, George

O. Henry の 短 篇

Meredith, H.G. Wells, R. L. Stevenson, Katherine Mansfield, 等, 各々相当のものである。

ところで之等の短篇作家達を大別すると大体三種になる。第一種は気分情調を表現せんとするもので、チエホフ、Poe, Ambrose Bierce, Katherine Mansfield, 等はこの部類に入る。第二種は性格描写に重点を置くもので、Hardy, Meredith, 等がこれに属し、第三種は筋の表現に重きを置くもので、これには Maupassant, Wells, そしてこの O. Henry 等が入れられる。一体短篇小説はその長さの関係からも、こうした三種のものがうまく融合して存在することは普通望むことそれ自身無理な話で、実際には不可能と云ってもよい位で、その何れかが特に目立つ結果になるのである。

O. Henry は確かに筋 story の作家であった。彼にはあまり性格描写もなく、特に気分情調を出そうとしたのでもない。その特徴は何といっても筋の変化極まりないことである。彼は story の変化を人物の situation の変化によって進行させる。そのために surprise や quick turn の技巧をしばしば使用したり、心理的必然性を犠牲にしていることさえある。story の短篇作家として、成程 Maupassant あたりから影響を受けたかもしれないが、決して Maupassant の naturalism を受け継ぎはしなかった。彼にはなお何処か彼一流の romantic な処があった。彼の作は屢々 super-natural な或いは神秘的傾向さえ示すことがあった。

O. Henry は決して性格描写に力を入れたりしなかったが、印象主義的な手法で、心理過程を読者の想像力の機能に委ねている。短篇作家の行き方としてこの方が賢明であるかもしれない。また彼の humor が浅薄だと云う人は 'The Four million' 中の The Furnished Room を読んでみられればよい。彼の humor にはまた一つの特徴がある。それは caricature の感じを出していることである。これは他に類例のない彼独得のものである。

O. Henry なる名前が William Sydney Porter の pen-name 乃至変名だということは今日では大概の者が知っているが、彼が死ぬまでは世間でそれを知っている者は左程多くはなかったのである。彼が例の事件もあって、自分の名前を出すのを惧れて、他人の名を変名に用いたという説もあり、薬屋にいた頃フランスの化学者 Etienne-Ossian Henry から思いついたという説もあり、また New Orleans にいた頃自作に自信がなく友人に相談して最も簡単な O. Henry という名前をつけたという説もある。O. Henry 自身が The New York Times の記者に語った所では、これは本当らしい。他に彼がテキサスで cow-boy をしていた頃、cow-boy の唄に “Along came my true love about twelve o'clock, Saying Henry, O Henry, what sentence have you got?” というのがあり、それから思いついたという説もある。また、Richard Duffy はその追憶中に語っているが、O. Henry というのが単なる pen name であるということを知り合ったか覚えていないが、それは彼が New York へ来ることを打合せする通信中であつたと思う。然し年次計画の準備をしている時彼の写真を入れて full name をつけたいので、頭字の O は何の略であるか尋ねる手紙を出したのを覚えている。それは習慣で、読者達の心に彼の名前をしっかりと刻みつけたかったのであつた。すると彼からは Olivier という名前を知らせて来た。そこで彼の物語を最初に予告した時は Olivier Henry としてであつた。後に O. Henry は Duffy 等の編集者に、充分宣伝効果のある O で始まる名前をさがさなければならなかつたとは何とおかしなことだつたでしょうと告白したとのことである。

兎に角 O. Henry という pen-name の由来がどうあろうと、それはさ程重大な問題でもない。彼は pen-name 乃至変名を使つたり、人生を漫画化してはいても、決して世間を冷眼視はしなかつた。彼は本質的には真面目で正直で、且つ小心であつた。それは彼が己が良心から自首したこと

O. Henry の 短篇

からも解るし、獄中の態度からも、病妻をいたわつた事からも、娘に対する深い愛情からも分るし、多くの作品によつてもうなずかれる。彼は humanist であった。漫画にも冷たい漫画と温い漫画があるが、彼のは後者である。時には sentimental な程弱く且つ貧しい者や犯罪者にも内心深い同情をもっていた。

彼は臨終に “Turn up the lights ; I don't want to go home in the dark.” と云つたそうである。彼はいつまでも暗い人生に蠢いていることを欲せず、明るさを好み温い心を求めた。‘A Retrived Reformation’ という作では金庫破りの悪漢が偶々善行をしたために探偵から見遁される。‘The Marionetts’ では偽医者 of 稀代の大賊が大金を恵んで去る。‘A Chapparral Prince’ では悪党の頭 Honds Bill がとるに足らぬ宿屋の下女を救い出す。然し、こうした明るさや温さは彼の希望たるに止まった。実人生は寧ろその反対で冷酷多難な形相を備えているのが、常に彼の眼に映っていた。彼自身の薄幸な生涯から彼は自らそれをひしひしと味つたことであろう。またそれは大資本主義のエルサレムである New York の到る処の街に展開される事実でもあった。そこから彼の心の半面である pessimism が生れた。The Cop and the Anthem の Soapy は何時迄もルンペンから浮び上ろうとせず、やつとそう思つても社会がそうさせない。また ‘Roads of Destiny’ で、羊飼の詩人に与えられた三つの道は、そのどれを選んでも辿り着く先は悲惨な死であつた。人間は救われ難い憐むべき者と彼は感じたであらう。その罪は誰であり何から来ているのか？ 彼は大思想家でも社会改良主義者でもなく、結局は一個の story teller であつたから、決して、その解決や改善指導などしなかつた。だと云つて彼の作品が芸術でないとは云えない。人生の humor と pathos を描き、変化あり、面白く興味ある筋の妙味をもつて不思議に象徴的に色々な場面人物を描き出して、読者を魅する処に彼の大きな芸術的価値があるのである。

なお Robert H. Davis と Arthur B. Maurice の共著 ‘The Caliph of Bagdad’ や Arthur W. Page の ‘Little Picture of O, Henry’ や Stephen Leacock の The Amazing Genius of O. Henry; St. John Adock の O. Henry; George Jean Nathan の O. Henry in his Own Bagdad. Arthur Bartlett Maurice の About New York with O. Henry; Caroline Francis Richardson の O. Henry and New Orleans 等をも参考にしたことを附記して置く。